九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『詠史詩』陳蓋注の特徴

岡村, 真寿美
九州大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9608

出版情報：中国文学論集. 32, pp.72-87, 2003-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

『詠史詩』陳蓋注の特徴

岡村　真寿美

一、はじめに

晩唐の詩人胡曾の詩集『詠史詩』には二系統あり、一つは陳蓋注本、もう一つは胡元質注本である。現存する『詠史詩』の注本はそのほとんどが胡元質注本であり、陳蓋注本は四部叢刊三編所収の『新雕注胡曾詠史詩』（以下四部叢刊本と略称する）のみである。[1]

陳蓋と胡元質がどういう人物であったのか全くと言ってよいほどわからないが、胡元質について『四庫全書総目提要』は南宋人ではないかと推測している。[2] 一方、陳蓋については、唯一『唐才子傳』巻六に、

今、『詠史詩』一巻、咸通中の人陳蓋の註有り。[3]

とあるのが注目される。咸通年間（八六〇―八七三）といえば、『詠史詩』の作者胡曾もまた、

曾、咸通末漢南從事たり。（『直齋書録解題』巻十九）

というようにこの時期に活躍したことがわかっているからである。さらに、四部叢刊本の冒頭に「邵陽叟陳蓋注詩」とあるが、胡曾もまた、

『詠史詩』三卷、唐邵陽胡曾撰。（同前）

と、同じく邵陽の人とされるのである。[4]

つまり、陳蓋は胡曾と同時期同郷の人であり、従って、或いは胡曾と面識があったかも知れない人物なのである。

当然、彼の『詠史詩』注は胡曽の『詠史詩』成立とそう離れない時期に作られた可能性が高く、『詠史詩』について考察する際には極めて重要な資料と位置づけられるべきものであろう。実際、胡曽が『詠史詩』序の中で述べる、

便ち首唱を以て相次ぎ、年代の推先を以てせず。[5]

という言葉の通り、年代の先後によらない排列となっているのは四部叢刊本のみであり、胡元質注系統本は年代順に排列し直されている。陳蓋注本が原書の形態を残す貴重な資料であることは斯様な点にも十分うかがえる。

しかるに、現存する『詠史詩』のほとんどが胡元質注本であるのは、取りも直さず胡元質注が登場して後はその系統の『詠史詩』が主流となり、陳蓋注本を圧倒したことを意味すると考えられる。その理由は、概ね二つ挙げられよう。一つは、先述の通り胡元質注が年代順の排列に改めたことである。『詠史詩』は、

近日兒童村學、教ふるに胡曾の詠史詩を以てす。(『升菴詩話』巻七)

などというように、童蒙教育書として広く使われたという。とすれば、年代順の排列の方がはるかに使いやすいに違いなく、胡元質注本の改編が歓迎されたと考えられる。もう一つの理由は、胡元質が、後述するごとく陳蓋注に較べてよりオーソドックスな文献を採用して注を作りかえた点にあろう。これに対し陳蓋注は、

皆雑以俚語不盡原文。

と評されるように[6]詠史詩の注としては不備の目立つものであった。斯様な陳蓋注であれば、胡元質注の登場以降顧みられなくなったのも仕方のないことだったかも知れない。

この卑俗さの故に、陳蓋注は従来考察の対象となることが少なかったように思われる。しかしながら、先述の通り陳蓋注は『詠史詩』版本の中でも重要な意味をもつ注本であることは疑い得ない。一方、『詠史詩』は童蒙教育書として読まれた他に、通俗小説と深いかかわりをもつという側面を持つ[7]が、なぜそのような特質を有するのか、明確な説明はついていないというのが現状である。してみれば、陳蓋注の研究は、『詠史詩』理解に資するのみならず、その通俗小説との関わりを考える上で何らかのヒントを与えてくれるのではなかろうか。本論では、陳蓋注の特徴について少しく考察してみたい。

二、陳蓋注と米評

四部叢刊本冒頭には、「前進士胡曾著述并序／邵陽叟陳蓋注詩／京兆郡米崇吉評注并續序」とある。すなわち、胡曾の『詠史詩』には、陳蓋の注のみならず、米崇吉[8]の「評注」が付されるのである。では、実際の注はどのように記されているかといえば、冒頭の「章華臺」詩[9]を例に挙げれば、次のようである。

『史記』曰、時楚靈王好大奢、乃役萬姓、築臺起宮、以金玉裝飾、號章華臺。常與美人燕樂於此。後出軍伐陳。靈王之兄患弟王不治國政、乃勒兵閉城攻王。王敗軍、獨騎奔投野人之家。遇鋗人曰、「與我一食。我不食三日矣。」鋗人謂曰、「新王下令、有飼王者、罪及三族。不可置食也。」既不得食、因枕其股而臥。鋗人畏人知之、乃以土代股而去。靈王飢甚、莫能起身、死於申亥之家也。夫勢盡道窮、人之常數。可以空山就死、何以下託甘言。此之謂見危而求安、不居安而慮危也。（巻上）

これではどこまでが陳蓋注でどこからが米崇吉評なのかまったく明確でない。しかし、四部叢刊本は、すべてこのような方式で注評を載せているのである。従って、四部叢刊本を読む場合、まずこの陳蓋注と米崇吉評の分離から取りかからなくてはならないことになる。では、どのように区切るべきなのか。

米崇吉は続序の中で、

敢へて顓愚に課して、篇を逐ひて評解し、用て前賢の旨を顯かにし、粗に當代の聞を裨ふ。[10]

と述べる。「評解」とは、「詩に関する批評と解釈」と解することができよう。そこで、注文の中の「批評」あるいは「解釈」にあたる部分を米崇吉の文章ととらえ、陳蓋注との分離を試みると、前掲の「章華臺」詩の場合、注文のうち末尾の、

夫れ勢盡きて道窮まるは、人の常數なり。以て空山に死に就くべく、何ぞ以て甘言に下託せん。此を之危を見て安を求むるも、安に居りては危を慮らずと謂ふ。

の部分が、明らかに詩に詠まれた歴史事件を説明する部分ではなく詩意を踏まえて批評する部分である。従って、

この末尾部分が米崇吉評であると仮定できる。

このような部分は、実は多くの詩の注文末尾に見え、それもこの「章華臺」の例と同じく、「夫」で書き出し、歴史事件から読み取れる教訓を挙げて論評する、というパターンであることが多い。斯様な「夫」ではじまる批評文は、表Ⅰの①欄の如く、かなりの数の詩に付される。また、このパターンではないものの、同じ意図の批評文ではないかと思われる部分がある詩も②欄のごとく分布する。これらの文章には、古典を引用して批評の拠り所とする手法もしばしば見受けられ、例えば「章華臺」の評文も、

此之謂見危而求安、不居安而慮危也。

とは、『易・繫辭下』の「是故君子安而不忘危。存而不忘亡。」を踏まえた表現であると思われる。斯様なパターン化した批評文は、同一人物が意図的に形式を統一して書いたものと推定され、これこそすなわち米崇吉評と考えるのが妥当であろう。

ただ難点は、巻三の後半になると、斯様な批評文の出現が極端に減少することである。もちろん、米崇吉がすべての詩に評を加えたのではないからとも考えられるが、巻一・巻二に於ける批評文の出現数と比較した場合、巻三の状況に違和感を覚えることは否めないことを指摘しておかねばなるまい。

一方、批評文以外にも一定のパターンを持つ部分が存在する。すなわち表Ⅰの③欄にあげた「此」ではじまる文章がそれで、

此れ燕太子の秦王を恨むこと窮まり無く、猶ほ易水の聲のごとしと爲すなり。（「易水」）

此れ堅の天道に良からずして、但だ兵の強きを恃むを謂ふなり。（「東晉」）

此れ仙藥は未だ廻らざるに始皇先づ死せるを爲すなり。（「東海」[11]）

などというものである。いずれも詩を解釈する内容であることから、米崇吉が行った「評解」の「解」にあたると考えることができる。また、批評文の多くに一定のパターンがあったことに照らせば、同じくパターン化の見られるこれらの文章もやはり米崇吉によると推定できるのではあるまいか。

ただし、陳蓋が歴史事件の説明に終始し、批評めいた文章や詩の解釈を述べる文章を全く書かなかったとは言い

〔表Ⅰ〕

巻一	①	②	③	④	巻二	①	②	③	④	巻三	①	②	③	④
烏　江	○				成　都					磨笄山	○			
章華臺	○				濡須塢		○?			官　渡				
細腰宮					檀　溪					虞　坂			○	
長　城				○?	青　塚					秦　庭	○			
沙　苑		○			李陵臺		△			延平津	○			
鉅　橋		○			河　梁	○				金義嶺				
沙　丘	○				軹　道	○		○		瑤　池	○			
石　城					上　蔡	○		○		商　郊				
洞　庭		○			漢　宮					銅　柱			○	
江　夏		○			豫讓橋	○	△			關　西				
荊　山		○			漢　中			○?		番　禺	○			
陽　臺					華　亭	○				咸　陽	○			
赤　壁					彭　澤	○				高陽池	○			
居　延		○			武　昌	○				瀘　水	○			
吳　宮	○				鴻　溝	○				云　亭				
阿房宮		○			東　山	○				細柳營	○			
沛　中		○?			涿　鹿	○				葉　縣				
金谷園	○				雲　夢		○			射熊館	○			
湘　川	○				孟　津	○				潁　川	○			
夷　門	○				七里灘	○?				八公山				
田横墓	○				霸　陵	○				夾　谷				
鴻　門	○	○			殺子谷	○				杜　郵			○	
黄金臺		○			馬　陵	○				柯　亭	○			
夷　陵	○				嶓　冢	○				綿　山				
漢　江		○			玉門關	○				葛　陂				
蒼　梧		○			昆　陽	○				鄧　城				
陳　宮					長　安	○				驢騾陂		○		
南　陽		○			滹沱河					栢　擧				
拼　墨	○				望夫石	○				緱　山				
渭　濱		△			黄　河	○				塗　山				
五　湖		○			東　門					豫　州		△		
易　水	○		○		鳳凰臺	○				博浪沙				○
長　平	○			○	廻　中	○				隴　西	○			
西　園	○				五丈原	○				白帝城				○
長　沙	○				泜　水	○				灞　岸				
圯　橋	○				褒　城	○				濮　水		△		
汨　羅	○				平　城					魯　城				△
青　門	○				汴　水	○				房　陵				
銅雀臺	○				金　陵	○				牛　渚				
東　晉	○		○		昆明池	○				廢丘山				
吳　江	○		○?		蘭臺宮	○				朝　歌	○			
函谷關	○				金牛驛	○				谷　口	○			
武　關		△	△		望思臺					武陵溪				○?
垓　下	○				邯　鄲		△			流　沙				
郴　縣	○				箕　山	○				大　澤				
東　海	○		○		洛　陽	△		○		傳　巖	○			○
首陽山	○		○	○	高　陽	○				灑　池			○	
姑蘇臺	○				會稽山	○				峴　山				
息　城	○				邵　陵					四　皓				
故宜城	○	△			不周山					滎　陽				

①：「夫」で始まる批評文がある。
②：それ以外の批評文がある。
③：「此」で始まる解釈文がある。
④：それ以外の解釈文がある。
？：注の途中に挿入される。
△：注か評か判断がつかないもの。

切れない。従って、表Ⅰの②欄や④欄に挙げた例や、注の途中に挿入される批評文などが果たして陳蓋によるのか米崇吉によるのか、明確にすることは困難である。そこで本論考では、先述のような米崇吉の「評解」にあたると推定される部分と、これらの陳蓋・米崇吉どちらの筆とも区別できない部分を除いた、詠史詩に詠まれる歴史事件について説明する文章を、「陳蓋注」として考えていくことにする。

三、陳蓋注の引用書

陳蓋注は、「歴史書」（本論では便宜上、注の出典を広く「歴史書」と呼ぶこととする）を引用して胡曽詩に詠まれた歴史事件を説明し、概ね毎詩出典を示している。その一覧が表Ⅱであるが、陳蓋注本の排列は先述の通り不規則なため、より分かり易いように、年代順である胡元質注本の排列を利用した。すると、陳蓋注が呈示する引用書は、先秦から秦までは『史記』、そのうち春秋戦国時代は『春秋左氏傳』『春秋後語』、漢代は『漢書』『後漢書』、といった具合に、概ね統一されているように思われる。

しかし、これらを実際の歴史書に照らした場合、ほとんどの文言が一致しない。例えば、『史記』を引用したとある詩は三十数例あるが、あきらかに『史記』を引用したとみなすことができるものは、皆無と言ってよい。もちろん、『史記』によったのであろうと推定される内容である注は多いが、完全に一致するということがないのである。次に「商郊」詩を例に挙げてみよう。

Ⅰ　『史記』曰、湯王、姓姒名履、字天乙。未遇時、至商郊、見野人張網而呪之曰、「欲東來者、入吾網中。欲南來者、入吾網中。欲西來者、入吾網中。欲北來者、入吾網中。邑令乃王密爲昌。從天來者、從地來者、四維上下、悉皆入吾網中。」而湯聞之、失聲曰、「盡矣。」乃除其網四面、只留一面而呪之曰、「欲東、任東。欲西、任西。欲南、任南。欲北、任北。欲上、欲下、四維八方、一任所往。吾取其犯命者矣。」天下聞之、皆爲湯王仁德、四十餘國並歸湯。夏帝桀紂無道、遂擧兵伐之。湯自稱天子、號殷武帝也。（陳蓋注）

Ⅱ　『史記』「商紀」、湯出野、見張網四面。祝曰「自上下四方、皆入吾網。」湯曰、「嘻、盡之矣。」乃去其三、祝

〔表Ⅱ〕

	引用書		引用書		引用書
不周山	史記	夷門	後語	河梁	
涿鹿	史記×	邯鄲	史	居延	漢書
洞庭	古史	澠池	後語	李陵臺	
箕山	古史	長平	後漢語	黄河	博物志
蒼梧	史記	拼墨	後語	望思臺	漢史
湘川	古史・博物志	豫讓橋	史記	東門	
嶓冢	史・帝王略論	成都		漢宮	
塗山		虞坂	史記×	青冢	前漢書×
商郊	史記	朝歌	史記×	射熊館	漢書
傅巖	史記	望夫石	列女傳×	昆陽	後漢書
鉅橋	史記	金義嶺		隴西	後漢書
首陽山	史記	易水	後語	白帝城	後漢書
孟津	史記	金牛驛	蜀記	滹沱河	後漢書
渭濱	史	鳳凰臺	史記×	銅柱	後漢書
漢江	春秋×	云亭		七里灘	後漢史
瑤池	史記×	長城	春秋後語	玉門關	「後漢」
褒城	史記	阿房宮	春秋後語	關西	漢書×
流沙	後語・左氏	東海	史記	柯亭	漢書×
葉縣	史記×	沙丘	史	潁川	古史
緱山	史記×	咸陽	後語	江夏	魏志
鄧城	史記×	上蔡	史記	葛陂	史記×・神仙傳
息城	春秋・列女傳	殺子谷	後語	銅雀臺	
邵陵	春秋	軹道	後語	西園	魏志
綿山	春秋	大澤	漢書	官渡	魏志
魯城	左傳	滎陽	漢書	灞岸	魏史
驩驩陂	左傳	廢丘山	漢史	濡須塢	
夾谷	(注なし)	鴻溝		赤壁	呉志
姑蘇臺	史記	長安	史記列傳・爾雅	檀溪	
章華臺	史記	平城	漢書	南陽	蜀志
細腰宮	史記	沛中	漢書	瀘水	蜀志
陽臺	史記×	鴻門	史	五丈原	志
武關	史記	郴縣	漢書	金谷園	晉史
汨羅	史記	烏江	(欽)	峴山	晉書
蘭臺宮	史記×	垓下	漢書×	延平津	晉書
荊山	史記	博浪沙	漢書	武昌	西晉書
呉宮	史記	圯橋	漢書	高陽池	晉書
會稽山	史記	漢中		華亭	西晉史
呉江	史記×	泜水	漢書	豫州	晉史
五湖	史記	雲夢	漢書	牛渚	東晉史
磨笄山	春秋×	高陽	史記列傳	東山	晉史
房陵	後語	田横墓		武陵溪	史記
黄金臺	後語	青門	漢書×	彭澤	史
濮水		四皓	前漢書	洛陽	晉史
馬陵	史記	長沙	漢書	東晉	南史×
秦庭	春秋	霸陵	漢書	八公山	南史×
栢擧	春秋×	細柳營	漢書	金陵	南史×
故宜城	後語	番禺	漢書×	沙苑	北史×
夷陵		谷口		石城	晉書×
杜郵	文選・後語	昆明池	漢書	陳宮	南史
函谷關	史記	廻中	漢書×	汴水	史記×

※空欄は、注に引用書名が明示されないことをあらわす。

曰、「欲左、左。欲右、右。不用命、乃入吾網。」諸侯聞之曰、「湯德至矣。及禽獸。」（胡元質注）

Ⅲ　湯出、見野張網四面。祝曰、「自天下四方、皆入吾網。」湯曰、「嘻、盡之矣。」乃去其三面、祝曰、「欲左、左。欲右、右。不用命、乃入吾網。」諸侯聞之曰、「湯德至矣。及禽獸。」當是時、夏桀爲虐政淫荒、而諸侯昆吾氏爲亂。湯乃興師、率諸侯。伊尹從湯。湯自把鉞以伐昆吾。遂伐桀。……於是湯曰、「吾甚武、號曰『武王』」。桀敗於有娀之虛、桀犇於鳴條、夏師敗績。……於是諸侯服。湯乃踐天子位、平定海内。（『史記』巻三「殷本紀」）

『史記』と比較すると、胡元質注がほぼ完全にその文章を引き写すのに対して、陳蓋注の方は、大意は『史記』とかわらないものの、表現などはかなり異なることがわかる。

また、陳蓋注が呈示する引用書に、実際にはそのような記事がないこともある。表Ⅱ中に「×」を付した詩がそれで、「鄧城」注を例に挙げれば次のようである。

『史記』云、昔、鄧侯據鄧城、其臣三甥謀曰、「君今地居楚之上流、方用而可擧兵伐之。不然、必來攻鄧。」侯不用其計。後、果被楚王將兵伐鄧而滅之、悔不用三生（ママ）之計也。

この記事は『左傳』荘公六年を出典とすべきものであり、しかも、その『左傳』の記事から、胡曽詩にも詠み込まれている「噬臍」の部分を省略してしまっていて、注としては甚だ不備なものである。このような引用態度を見せる陳蓋注とは、極めて杜撰な注であると言わざるを得ず、前述の如く張論文が「雜以俚語不盡原文」と批判したのも肯けよう。

しかしながら、陳蓋注がすべて「歴史書」を無視したいいかげんな内容というわけではない。先に挙げた「商郊」詩について見ても、確かに表現は変わってしまっているが、大筋で『史記』の内容をきちんと踏まえていることがわかる。これと同じく、陳蓋注の多くは、完全な引用とは言えないものの、程度の差はあれ、何らかの形で「歴史書」の記述を踏まえた内容になっていると言ってよい。

また、例えば、「漢江」詩注は、

『春秋』云、昔、周昭王道喪。楚人不朝敬、王自去征、濟於漢江。船人惡之、乃作船以膠粘合、進王。王乘船、至中流、膠之沉水而崩也。

というが、『春秋』にこの様な記事は見あたらない。しかし、この文章は、『史記・周本紀』の正義が引用する晋・皇甫謐『帝王世紀』に、

昭王德衰。南征、濟于漢。船人惡之、以膠船進王。王御船、至中流、膠液船解、王及祭公俱没于水中而崩。

とあるのと極めて近い。同じように、表Ⅱで「×」印を付した詩のうち一〇例前後は、これも引用書との合致の程度はまちまちであるが、何らかの基づく資料があったと考えられるのである。

ところで、「東海」詩注は次のように言う。

『史記』曰、秦始皇併天下後、好仙。有道士徐福、上言、「東海有三神山、山上有仙藥。」帝乃選童男童女各五百人、隨福入海採仙藥。未廻、始皇東巡、沙丘、身崩。後、天下亂、徐福不知何之、竟不廻矣。始皇字祖龍。（傍線筆者。以下同じ）

この注は、『史記・秦始皇本紀』に、

二十六年……既已齊人徐市等上書言、「海中有三神山、名曰蓬萊・方丈・瀛洲。僊人居之。請得齋戒、與童男女求之。」於是遣徐市、發童男女數千人、入海求僊人。

【正義】漢書郊祀志云、此三神山者、其傳在勃海中、去人不遠。蓋曾有至者諸仙人及不死之藥、皆在焉。……

とあることなどに基づいていると思われる。しかし、最後に、「東海」詩に詠み込まれた「祖龍」を説明して「始皇字祖龍」というのは何故か。「始皇紀」には、

三十六年、……秋、使者從關東、夜過華陰平舒道、有人持璧遮使者曰、「爲吾遺滈池君」、因言曰「今年祖龍死。」使者問其故、因忽不見、置其璧去。使者奉璧、具以聞。始皇默然、良久曰、「山鬼固不過知一歲事也。」退言曰、「祖龍者、人之先也。」

との記載があるのに、これは読んでいないらしい。とすれば、注の前半についても、注者自身が『史記』を読んでいたかどうか、極めて疑わしく思われてくる。

一方、「田横墓」注は、

Ⅰ　者（ママ）、漢王初定天下、諸侯各稱王。齊有田横、稱齊王。漢王遣韓信收趙、未伐齊、漢王使酈生説齊、令降漢。

横乃罷兵降漢。酈生在齊、未還、李左車説韓信曰、「將軍興兵百萬、半年方收趙五十城。今酈生軍呈言舌下主七十城、功不如酈生也。且漢王曾有詔令將軍伐齊。今齊雖降王未詔、士令伐齊有詔。使任彼心不設備、宜擧兵伐之、但執前詔。」信納其言、乃發兵。横怒、謂酈生曰、「漢王汝存慰於吾、而今韓信求。汝若爲可止韓信之、汝若不止、當烹之。」酈生曰、「信執漢王前詔。」亦登城觀之、乃曰、「韓信計已成。」乃就烹而死。

後、天下定、諸侯皆朝。田横懼誅、引徒屬五百餘人入海島中。漢帝以齊國向來賢皆附之信、詔横、横與二客洛陽三十里、謂人曰、「吾曾烹酈生、帝雖不罪、我乃不愧心。今帝在洛陽、請斬吾頭、馳往三十里、形容未改、與生見不別。」遂自刎。今二客奉頭進高祖。帝嗟曰、「有似也。夫有兄弟三人更王、齊中豈不賢哉。」田横、田榮、田横三人、乃與二千人以王葬之。其二客穿其塚傍作孔、皆自刎而入。義。上感而不敢哭、乃作薤露歌詞寄其哀情。今挽歌是也。

II ①范陽辯士蒯通説信曰、「將軍受詔擊齊、而漢獨發間使下齊、寧有詔止將軍乎。何以得毋行也。且酈生一士、伏軾掉三寸之舌、下齊七十餘城。將軍將數萬衆、歲餘乃下趙五十餘城、為將數歲、反不如一豎儒之功乎。」於是信然之、從其計、遂渡河。齊已聽酈生、即留縱酒、罷備漢守禦。信因襲齊歷下軍、遂至臨菑。齊王田廣以酈生賣已、乃亨之。

（『史記』巻九二「淮陰侯列傳」）

②淮陰侯聞酈生伏軾下齊七十餘城、廼夜度兵平原襲齊。齊王田廣聞漢兵至、以爲酈生賣已、廼曰、「汝能止漢軍、我活汝。不然、我將亨汝。」酈生曰、「擧大事不細謹、盛德不辭讓。而公不爲若更言。」齊王遂烹酈生。

（『史記』巻九七「酈生陸賈列傳」）

③後歲餘、漢滅項籍、漢王立爲皇帝。……田横懼誅、而與其徒屬五百餘人入海、居島中。高帝聞之、以爲田横兄弟本定齊、齊人賢者多附焉、今在海中不收、後恐爲亂。廼使使赦田横罪而召之。……田横廼與其客二人乘傳詣雒陽。未至三十里、至尸鄉廐置、横謝使者曰、「人臣見天子、當洗沐。」止留。謂其客曰、「横始與漢王俱南面稱孤。今漢王爲天子、而横廼爲亡虜、而北面事之。其恥固已甚矣。且吾亨人之兄、與其弟併肩而事其主、縱彼畏天子之詔不敢動我、我獨不媿於心乎。且陛下所以欲見我者、不過欲一見吾面貌耳。今陛下在洛陽。今斬吾

頭、馳三十里間、形容尚未能敗、猶可觀也。」遂自到、令客奉其頭、從使者馳奏之高帝。高帝曰、「嗟乎、有以也夫。起自布衣、兄弟三人更王、豈不賢乎哉。」爲之流涕、而拜其二客爲都尉、發卒二千人、以王者禮葬田横。既葬、二客穿其冢旁孔、皆自到、下從之。高帝聞之、廼大驚、以田横之客皆賢。（『史記』巻九四「田儋列傳」）

と、『史記』の三列伝を組み合わせて注を書いている。このような作業は、『史記』に関してかなりの知識を有し、きちんと読んだ上でしか成し得ないことであろう。

つまり、同じ陳蓋注の中に、『史記』について、正反対の性質を有する部分が存在するということになるのだが、これらの注がともに陳蓋の筆によると考えるのは果たして妥当だろうか。『史記』に限らず、陳蓋注では、一方で「歴史書」に関して極めて正確な知識を持っていると感じさせる部分があるかと思えば、他方で同一の「歴史書」に対する知識の乏しさを露呈する部分が見られる、といったことが随所に見られる。このような実態を考える時、陳蓋の「歴史書」に関する知識の程度には大いに疑問を持たざるを得ない。すなわち、陳蓋自身はそのような知識に乏しく、従って彼自身が直接様々な歴史資料から注を作ったのではなく、別の先行文献を利用して注にまとめたと考える方が妥当なのではなかろうか。

さて一方で、陳蓋注の中には確かに「歴史書」から乖離したような話も散見する。例えば、「磨（摩）笄山」詩注は、

『春秋』に云ふ、昔、趙侯其の子襄子岱侯を伐つ。侯襄子と岱山の下に戰ひ、岱侯襄子に之を殺さる。岱侯の妻は乃ち趙侯の女なり。夫の擒はるるを聞き、乃ち兵を將ゐ往きて之を救はんとするも、此の山に至りて夫の已に死するを聞き、乃ち馬を下りて、頭上に於て笄を抽き、磨きて自ら刺して死す。趙雖ち國を併せり。[12]

というが、この話は『春秋』には見えず、おそらく『史記』もしくは『春秋後語』[13]あたりに基づいて書かれたのであろう。しかし、この事件では、代王夫人は一般に弟趙襄子の仕打ちに対して悲嘆してまたは憤って自殺するという筋立てで登場し、陳蓋注のように彼女が自ら軍隊を率いて夫の救出にむかったというのは異色の展開である。胡曾詩自体は、「春草綿綿として岱日低る、山辺に馬を立てて摩笄を看る。黄鶯も也た前事を追ふに似て、夫人の死

せし處に來向りて啼く[14]」というのであるから、別段代王夫人の勇ましさを説明する必要もない。

また、「垓下」詩では、

『漢書』に云ふ、項羽は垓下に大敗し、漢相張良吳楚の歌を唱はしめば、將士潰散す。王軍を起さんと欲するも、軍已に散ぜり。王乃ち轡を攬り烏騅を備へて出で、身に金甲を穿け、五仗兼備し、則ち虞姫と別る。虞姫問ひて曰く、「大王何處にか去かんと欲す」と。王曰く、「寡人江東に歸り兵を起さんと欲す」と。虞姫曰く、「妾は王に從ふこと能はず、亦た漢の臣と爲ること能はず。妾王の腰間の劒を請はん」と。王美人に劒を賜ひ、乃ち劒を將て自刎して死す[15]。

という。『漢書』には虞姫の最期についての記述はない。一方胡曽詩は、「拔山の力盡きて勢圖隳る、劒に倚りて空しく歌ふ『騅逝かず』と。明月營に満ちて天水に似たり、那ぞ首を迴らして虞姫に別るるに堪へん[16]。」というのだから、むしろ『漢書』に載せる「垓下歌」を引用すべきところであるが、陳蓋はそれをしないのである。この様な例を見れば、陳蓋注は、詠史詩に詠まれる歴史事件の紹介という大目的からいささか逸脱してしまっているようにも感じられる。

ただし、純粋に物語として読んだ場合、これはこれで面白い展開であるのも事実である。例えば代王夫人が武装して登場すれば、「摩笄」の物語は歴史書に描かれる悲劇とはまた全く違った相貌を見せることになろう。また、「垓下」詩注の項羽が武装して登場するくだりなどは、まるで芝居か小説の一場面のようですらあって、詠史詩の注としては適当とは言えないかも知れないが、ハナシとしては魅力的である。では、斯様な詩注は、陳蓋自らが自由に筆を進めたものであったろうか。

王昭君を詠んだ「青塚」詩の注に次のように言う。

『前漢書』に云ふ、昔、王昭君は絶世の色有り、漢元帝の妃と為る。時に西藩強いて婚を漢帝に請ひ、乃ち昭君を藩に嫁せしむ。昭君藩に到り、藩の腥醜非昊なるを怨む。百日にして死す。藩之を憐れみ、遂に漢界に葬る[17]。

『漢書』には、王昭君が和平の証として匈奴の呼韓邪単于に与えられたこと、また彼女が呼韓邪の死後、その息子

の妻になった記事が見え[18]、陳蓋注が『漢書』に基づかないことは明らかである。

この注を読んだ場合、読者はむしろ「王昭君変文」を想起するのではなかろうか。「王昭君変文」は、王建「觀蠻妓[19]」や吉師老「看蜀女轉昭君變[20]」といった詩の存在からも明らかなように、胡曽や陳蓋の生きた晩唐期に行われていたと考えられる。陳蓋はその「王昭君変文」か、或いはそれに代表される当時の昭君関連の俗説に基づいて注を書いたのであろう。

このような例からして、陳蓋注は、時に当時の通俗文芸の世界に取材していたのではなかろうか。このことは、「平城」詩注に「今傀儡子、是也」という言葉が見えることからも確かなように思われる。してみれば、陳蓋注の中には当時の通俗文芸の姿を垣間見ることのできる資料が含まれている可能性があるということになる。胡曽詩が通俗小説と密接に結びついていることを考えれば、斯様な陳蓋注の性質は、極めて重要な意味を持つと言わねばならない[21]。

四、おわりに

陳蓋注は、胡元質注がほぼ完全に「歴史書」に忠実な引用で統一されているのと比較すれば、非常に雑駁な印象を受ける。確かに、「歴史書」をきちんとふまえた注がある一方で、同じ文献について、全く知識を持っていないのではないかと思わせる注もあったり、さらには荒唐無稽とも思われる話を紹介する注まで存在したりと、実に様々な要素を併せ持っている。この様な内容は、詠史詩の注としては望ましいとは言い難く、結果、胡元質注の登場以後廃れることになったのであろう。

そういった内容になってしまった背景には、陳蓋自身が用いた資料の存在があると思われる。陳蓋が自身の歴史知識のみで、自力で「歴史書」を参考にしてこの注を書き上げたのなら、この様な不統一な内容にはならなかったはずである。そこにはまた陳蓋という人物の、文人としてのレベルの問題が横たわっているのであろう。陳蓋がどういう人物であったのか、この注の内容からして、ある程度想像できるように思われる。

しかしながら、詠史詩の注としては必ずしも良好なものとは言えないとしても、むしろその雑駁な内容が、当時を知る貴重な資料を保存している可能性も秘めている。「歴史書」の記述から逸脱した部分に、当時の通俗文芸とのつながりをうかがわせるものが含まれていることは上文で述べたとおりであるが、他方「歴史書」を踏まえると思われる部分が、同じような性質を有する可能性もあろう。例えば、様々な文献を組み合わせて一つの歴史事件を語ろうとする手法は、講史小説につながると捉えられなくもない。

斯様な陳蓋注の性質は、通俗文学の発展過程を知る上で貴重な資料を提供してくれる可能性を示しているとともに、胡曽詩と通俗文学との関係について考える上でも重要な意味を持ってくるはずである。胡曽詩が通俗小説と非常に密接な関係を有することは知られているが、その理由はよくわかっていない。そこには、胡曽詩が童蒙教育書であったらしいということも作用したであろう。しかし、陳蓋注の性質を詳細に検討するとき、この注の存在が、胡曽詩と通俗文学の世界とを結びつける何らかの役割を果たした可能性は十分あるように思われるのである。

ところで、陳蓋注が呈示する引用書と、実際の引用「歴史書」とにずれがあることが多いと述べたが、実は呈示される引用書は、最初から示されていたものではなく、もともとあった文章の最初に、時代を勘案して『史記』『漢書』など適当につけられていったのではないだろうか。全てとまでは言えないにしても、かなりの部分がそういう操作を受けていたのではないかと思われる。そう考えれば、実際の引用書に関わらず、時代順にほぼ同じ歴史書が呈示されていることにも納得がいく。また、例えば「武陵溪」詩注の引用書が『史記』になっているのも、おそらく注文中の「秦始皇」という言葉から、秦頃の話であると誤解し、『史記』を引用したとしてしまったと考えれば、これも説明がつくのである。

しかし、その操作を誰が行ったのであろうか。陳蓋注が何らかの先行文献を集めて作られたものだとすれば、陳蓋自身が注の体裁を整えるために、最後の仕上げとして引用書名を入れていったものかも知れない。あるいは、陳蓋が作った注は本来出典名を必ずしも明示しないままだったものを、後に注としての箔付けの意味でもあったのか、別の誰かが引用書名を適当に付したとも考えられる。四部叢刊本のタイトルには「新彫」とあるのだから、「旧」陳蓋注『詠史詩』が他に存在したのかも知れず、或いはそうした再刊過程のどこかで上述の如き操作が行われたの

かも知れない。してみれば、現存の陳蓋注と「原陳蓋注」との間に差異があるとも考えられることになる。すなわち、陳蓋注の成立過程自体にも注意を払う必要があるということになろう。

陳蓋注とは、様々な意味で、まことに難解な資料であることは間違いないところである。

注

（1）ただし、和刻本に陳蓋注が残っていることについては、黒田彰氏編著『胡曾詩抄』（伝承文学資料集成第三輯　一九八八年　三弥井書店）に詳しい。

（2）『四庫提要』：「觀所引證、似出南宋人手。」但し、四庫全書所収『詠史詩』は、注者名不詳になっている。その他胡元質については、小川環樹・木田章義両氏注解『千字文』（岩波文庫三三―二二〇―一　一九九七年）「解説」参照。

（3）原文：今詠史詩一卷、有咸通中人陳蓋註。

（4）胡曾については、長沙の出身であるという説もある。拙論「節度従事としての胡曾」（中国文学論集第三十一号）参照。

（5）原文：便以首唱相次、不以年代推先。四部叢刊本には闕字があるため、成賓堂文庫所蔵『明字排字廣附音釋文三註之上　詠史詩』により補った。

（6）『歴史語言研究所集刊』一〇（国立中央研究院歴史語言研究所、一九四八年）所収　張政烺「講史與詠史詩　四、胡曾詠史詩」。

（7）例えば鄭振鐸『插図本中国文学史』（一九三二年　北平樸社出版部）に、「胡曾有『詠史詩』百篇、盛傳於世、凡通俗小説、像『三國志演義』『隋唐志傳』等等、殆無不引入曾的『詠史詩』。」と指摘される。

（8）米崇吉の事跡は詳かでない。前掲張論文は、「米氏乃西域米國歸化人、卽昭武九姓之一。崇吉蓋胡兵之子弟、故云『余非士族、跡本私門』。孫星衍曰、『其續序云近代胡曾、是米俱唐人也』（廉石居『藏書志』内編巻上）、今按至遲亦當在後唐之世。」とする。

（9）第一首は「烏江」であるが、詩句及び注文の大半を欠く。

(10) 原文：敢課顓愚、逐篇評解、用顯前賢之旨、粗裨當代之聞。

(11) 原文：此爲燕太子恨於秦王無窮、猶如易水之聲也。（「易水」）此謂堅不良天道、但恃兵強也。（「東晉」）此爲仙藥未廻、始皇先死也。（「東海」）

(12) 原文：『春秋』云、昔、趙侯其子襄子伐岱侯。侯戰襄子於岱山之下、岱侯被襄子殺之。岱侯妻乃趙侯之女也。聞夫被擒、乃將兵往救之、至此山聞夫已死、乃下馬、於頭上抽笄、磨而自刺死。趙雖併國矣。

(13) 『史記』巻四十三「趙世家」：「襄子姊前爲代王夫人。簡子既葬、未除服、北登夏屋、請代王。使廚人操銅枓、以食代王及從者、行斟、陰令宰人各以枓擊殺代王及從官、遂興兵平代地。其姊聞之、泣而呼天、摩笄自殺。代人憐之、所死地名之爲摩笄之山。」『太平御覽』巻七百十八「服用部二十・笄」：「『春秋後語』曰、趙襄子之姊爲代王夫人。襄子併代、殺王、平其地。其姊聞之、泣而呼天、磨笄自殺。代人憐之、名其地爲磨笄山。」

(14) 原文：春草綿綿岱日低、山邊立馬看磨笄。黄鶯也似追前事、來向夫人死處啼。

(15) 原文：『漢書』云、項羽垓下大敗、漢相張良唱吳楚之歌、將士潰散。王欲起軍、軍已散矣。王乃攬轡備烏騅而出、身穿金甲、五仗兼備、則別虞姬。虞姬問曰、「大王欲何處去。」王曰、「寡人欲歸江東起兵。」虞姬曰、「妾不能從王、亦不能爲漢臣。妾請王腰間劒。」王賜美人劒、乃將劒自刎而死也。

(16) 原文：拔山力盡勢圖隳、倚劒空歌不逝騅。明月滿宮天似水。那堪迴首別虞姬。

(17) 原文：『前漢書』云、昔、王昭君有絶世之色、爲漢元帝妃。時西藩強請婚於漢帝、乃嫁昭君於藩。昭君到藩、怨藩腥醜非昊也。百日而死。藩憐之、遂葬於漢界。

(18) 『漢書』巻九「元帝紀」、巻九十四下「匈奴傳下」。

(19) 『全唐詩』巻三〇一。

(20) 『全唐詩』巻七七四。

(21) 「五丈原」詩注が『三国志演義』に影響を与えた可能性について、金文京氏『三国志演義の世界』「三　『三国志』から『三国志演義』へ」（東方選書25　一九九三年）に指摘がある。これも陳蓋注と通俗文芸との関連を示す証拠の一つと言えよう。

『詠史詩』　陳蓋注の特徴